

『計量国語学』アーカイブ

<b>ID</b>	<b>KK300408</b>
<b>種別</b>	追悼
<b>タイトル</b>	宮島達夫先生の思い出
<b>Title</b>	Memories of Professor Tatu Miyazima
<b>著者</b>	庵 功雄
<b>Author</b>	IORI Isao
<b>掲載号</b>	30巻4号
<b>発行日</b>	2016年3月20日
<b>開始ページ</b>	240
<b>終了ページ</b>	242
<b>著作権者</b>	計量国語学会

追悼

## 宮島達夫先生の思い出

庵 功雄 (一橋大学)

宮島達夫先生が亡くなられた。少し前から体調が悪くお悪いとは聞いていたが、ごく最近まで立川市にある国立国語研究所でお元気なお姿を拝見していた印象が強くあり、また、J.V. ネウストプニー先生に続いてということもあり、寂しいという思いが強い。

宮島先生に初めてお目にかかったのは、私が修士に進学した 1991 年 4 月のことだったと思う。先生の印象を一言で言うと、「フットワークが軽い」ということであつた。大阪大学に着任されてまもなく、大学周辺のかかなり広い範囲をいろいろと歩かれて、私たちが知らない情報を数多く聞かせてくださったものである。

研究に関して言えば、宮島先生が阪大にいらっしゃって最も変わったのは「コーパス」ということであろう。それまでの阪大の文法研究は「カード式」によるものであつた。つまり、例文をルーズリーフに貼り付けて分類するというものである。それが、宮島先生が来られてから、「コーパス」を用いた研究が中心になっていった。

当時は「コーパス」と言っても、自分たちで作るものが中心であつた。私が属していた阪大文学部には OCR がなく、同じ豊中キャンパスの言語文化部にあつた大型の OCR 機を借りて小説などをスキャンし、院生たちで校正してコーパス化していった(その OCR 機は 700 万円したと聞いた)。このようにして作ったコーパスの他に、宮島先生が使わせてくださった新聞関係のコーパス、「新潮文庫の 100 冊」をコーパス化したものなどが私たちの言語分析のツールとなつた。

当時のコーパスの使い方は、現在から見ればかなり「泥臭い」ものであり、コーパスを使って論文を書いていると言うより、例文を探すのにコーパスを使っていると言つた方が正確であつた(ちなみに、コーパスのこうした使い方はコーパス言語学からすれば邪道であるかもしれないが、面白い文法研究という点からは今でも使つていい手法だと個人的には考えている)。

このように、「宮島以前」と「宮島以降」で阪大の宮島・仁田ゼミ関係者の研究の手法は大きく変わった(ちなみに、宮島先生が導入された手法を最も自分のものにしたのは畏友張麟声氏であろう。1992 年に博士課程の研究生として来日した当時、ワープロが使えず、ゼミの発表原稿が手書きだつた(そして、そのあまりの達筆にゼミの出席者一同が読むのに苦労した)張さんが、その 5 年後、当時一般に使えた全てのコーパスの全数調査に基づいて、日本語受動文に関する博士論文を書き上げたことは、宮島先生が導入された研究手法の成果としても、特筆に値することであると考える)。

宮島先生の業績ということからすると、第一に挙げられるのは『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43, 1972 年)であろうが、ここでは、先生の博士論文でもある『語彙論研究』(むぎ書房, 1994 年)の中から、私が特に好きな論文を取り上げて少し考えてみたい。取り上げる論文は「「ドアを開けたが、開かなかつた」」「動詞の意味

範囲の日中比較」「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」「形容詞の語形と用法」である。

最初の 2 本は相互に関係が深いが、日本語と中国語で「結果」ということがどのように表されるかということ扱ったものである。今ちょうど、修士論文と博士論文の指導で、「変化」や「結果」に関わる問題を学生と一緒に考えているのだが、そうしたとき、宮島先生のこれらの論文のことがよく思い出される。

「移動動詞」の論文は、言語の比較における「類似」と「相違」という観点を教えてくれる論文である。例えば、ドイツ語では「乗り物で行く」場合と「歩いて行く」場合は単語レベルで異なる (fahren と gehen) が、英語、フランス語、日本語では両者は連語レベルでしか区別できない。この論文では、「移動動詞」という意味フィールドを設け、その中で「類似」と「相違」という観点から複数の言語を比較している。これは、「意義素論」とも通い合うオースドックスな言語学の手法であると思うが、対照研究において非常に重要な観点を提供しているように思われる。私自身、修士論文以来、名詞句の問題を中心に対照的に議論を行いたいと考えてきて、ある程度答えが見つかりつつあるように思っているのだが、そうしたとき、この論文の見方は格好のモデルになってくれている。

最後の「形容詞」の論文は、言語における機能の違いが量的側面に反映することを教えてくれる論文である。形容詞には、連体用法、終止用法、連用用法があるが、基本的な形容詞でこの 3 用法を全て備えているのは 3 割強しかなく、連用用法を欠くものは 6 割強であるという。これには、形容詞が「修飾」を基本とする品詞であること、形容詞の連用形には副詞に当たるもの (派生) と節の接続形 (屈折) という異なる機能が融合していることなどが関連していると思われるが、特に後者は「活用」ということから見ても非常に興味深いところである (ちなみに、この論文は IPAL (計算機用日本語基本形容詞辞典) の研究に刺激されて書かれたものであるが、私は、今の日本語学の若手研究者、特に、計量的な問題に関心を持っている人に、ぜひこの IPAL の報告書を読んでほしいと思っている。これらの研究を見れば、そこから必ずや研究上の Breakthrough が見つかるはずである)。

以上取り上げた 4 本の論文に共通しているのは、宮島先生の卓越した語学力である。先生ご自身で最も得意でいらっしゃったのはドイツ語のようだが、「英語ができないとも言えないしねえ」とさりとらおっしゃるのを聞いて、かっこいいと思ったことを今でも覚えている。先生はヨーロッパ語だけではなく、中国語や韓国語に関してもお詳しかった。

言語能力ということ言えば、先生は方言にも強い思い入れをお持ちだった。先生が一度、「僕は茨城弁で大学の講義ができるよ」とおっしゃったことがある。先生の話しことばのアクセントは茨城弁の影響を強く受けていたが、ここで言うのはそのレベルのことではなく、語彙や文法も完全に茨城弁にして大学の講義を行うということである。私自身、自分が大阪弁で講義ができるかをそれ以来ずっと考えてきているのだが、おそらくできないだろうと思っている。ただ、大学を辞めるまでに一度はやってみたいとも考えている。

私は宮島先生から宿題をいただいている。2012 年に拙著『新しい日本語学入門』(スリーエーネットワーク) の第 2 版を出し、それを先生にお送りしたとき、メールで、「コーパス」や「日本語教育文法」があるのに、「語彙論」と「表記論」がないのは問題だというご意見をいただいた。全くその通りであるので、その点を改めた第 3 版を出し、先生にお見せしたいと考えていたのだが、それはかなわないことになってしまった。しかし、必ず第 3 版を出し、その際には「語彙論」「表記論」を含めた日本語研究の包括的入門書

として、先生の御霊前に捧げたいと思っている。

宮島先生、長い間本当にありがとうございました。

(2016 年 1 月 16 日受付)